

二〇二六年一月三十一日

日矢さして大和の嶺々も春まぢか
仁王門をくぐるや否や風花す
一望の枯葦原に風わたる
鶯もち並ぶ菓子舗の明るさよ
満帆に春風はらみ外海へ
湯気の立つ屋台に長蛇広場凍つ
寝転べば至福や日射す枯芝に
花舗いまし溢れんばかり春の色

二〇二六年一月三〇日

群鳩の虜となりぬ福詣
朝焼けに影絵散らしや鶴帰る
公園のベンチ落葉が席卷す
愛のチョコ赤が氾濫菓子売場
悴める手に息吹きつ人を待つ
愛用す祖母の手縫のちやんちゃんこ

二〇二六年一月二十九日

金柑の豆電球のごとたわわ
裸木に透けて落ち行く夕日かな
銀輪で丘駆け上る寒風子

二〇二六年一月二十八日

老幹の冬芽親しき国寿かな
泳がせて洗ふ水菜や金盞
旅の地図ひろげてなぞる春炬燵

明日香

よし女

ほたる

あひる

山椒

たか子

むべ

こすもす

なつき

山椒

きよえ

康子

うつぎ

もとこ

あひる

きよえ

えいじ

よし女

あひる

康子

嵩高く雪を被りし六地藏

高窓の氷柱を射抜く夕日かな

二〇二六年一月二十七日

天へ鉾立ちてセコイアや春を待つ
寝ねやらず枕辺に聴く寒の風
日脚伸ぶ畳目しるき奥座敷
躊躇せる足跡と見し雪の路地

二〇二六年一月二十六日

昨夜の雪庭を白変して去りぬ
ひとつ星残し寒暁広がりぬ
寒釣りの不撓不屈や風の岸
鉄橋の果にとどまる寒落暉

二〇二六年一月二十五日

押せば回る睡蓮鉢の厚氷
繰返すバック前進除雪中
旅苞にさるばぼを買ふ雪の飛驒
風花す消息葉書読みをれば
紅梅のひと枝が似合ふ益子焼

愛正

ほたる

青海

よし女

澄子

こすもす

よし女

むべ

えいじ

澄子

うつぎ

こすもす

千鶴

せいじ

もとこ

毎日句会みのる選・二〇二六年二月二日